

一手前

師匠の榊九段が
死んだのは、
七夕の朝だった。

医者の診断は
心臓発作だった。

その三日後、
私は再び師匠の家を
訪ねた。

島田さん。

師匠の一人娘、雫。
二十二歳。
大学で数学を
学んでいる。

私たちは二年前から
付き合い、彼女の卒業を
待って結婚するつもりで
いた。

父の日記を、
一緒に読んでもらえ
ますか。

この手帳を見るのは、
初めてではなかった。

かつて

地方から出てきた私に、
師匠は部屋と食事を
与えてくれた。

将棋以外に何も
できなかった私を、
棋士になるまで
育ててくれた。

先生、
研究会を移ろうと
思うんですが……

プロになってからも、
何かを変えるたびに
師匠に相談した。

まだ早い。

相談のつもりが、
いつも許しを
求めていた。

負けました。

その日、
初めて師匠に勝った。

先生。
澤さんとの結婚を、
お許しいただきたい
んです。

まだ早い。

おまえは、
自分のことも
満足にできて
いない。

誰がおまえを、
ここまで食わせて
きたと思っている。

そんな言い方を
されたのは
初めてだった。



私は滯と暮らす部屋をまだ探してもいなかった。



最後のページ
なんです。

子供のころ

父と娘は、誕生日の
祝いまで暗号にする
ような間柄だった。

おめでとうって、
普通に言えば
いいのに。

普通に言ったら、
それで終わりだ。

何か隠してると
思うんです。

師匠の字は大きかった。
句読点も、一字ずつ
律儀に並んでいる。



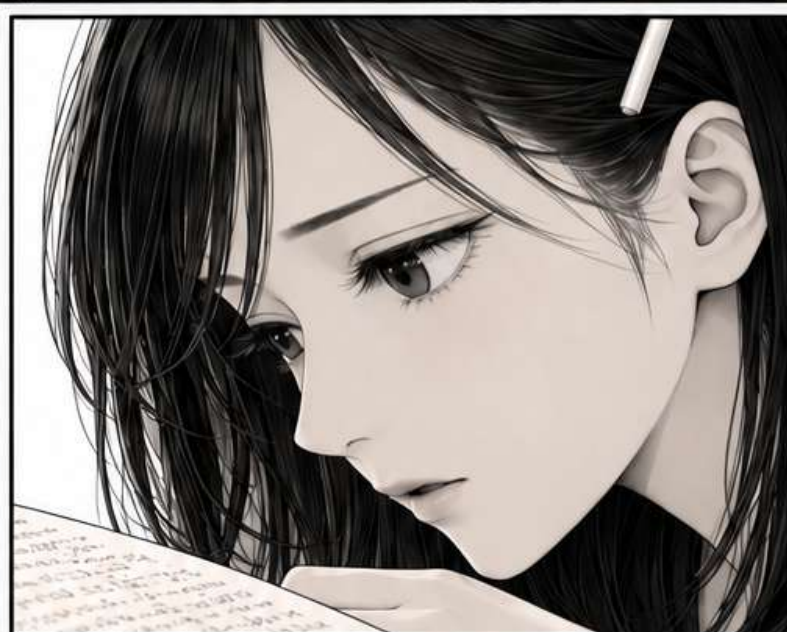
七月六日

歩をろくに前へ出せず、めずらしく負けた。きっと歳のせいだ。がらにもなく、少しえらそうに言った。まだ遅くはないが、お茶が冷めている。明日は私から話しかけてみようか。



私が結婚の許しを求めた、その夜の日記だった。

七月六日……



私は、幼かった湊に
師匠が将棋を教えて
いた日のことを
思い出した。



子供のころ

先手の歩は、
ひとつ上へ進む。

筋は右から、
段は上からだ。

行き先ばかり
見るな。
出発点を忘れるな。

初手、七六歩。
一手前には
どこにいた。

私は、彼女が
顔を上げるのを
待った。





